

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」 (その17)

1935(昭和10)年8月号

大塩川に水力電気会社をつくる計画が発覚する。
農村産業組合学校に対するいやがらせが続く。



監修 堀越芳昭
山梨学院大学 元教授

チフスで母を亡くした久世要蔵が東助の家にやってきた。彼の話によると「山根代議士の肝入りで大塩川に水力電気を起こそうという計画がある」ということであった。東助らは村民に反対を訴えるもののその一週間後に測量隊がやってきた。

東助はお盆の時期に「農村産業組合学校」を開校することを周到に準備してきたが、山根一派の人々に執拗ないやがらせを受けるも、なんとか開校にこぎつけた。

■「大塩川をせきとめて、水力電気会社をつくる」計画が発覚する

チフスで母を亡くした久世要蔵が、東助と島貫がハチ蜜を詰めたブリキ缶を運ぼうとしているところへやってきた。彼は「ハイカラな絹地の夏服を着込み、どの重役かと思われるような金縁眼鏡をかけ、ステッキまでついていた」のである。

それを見た島貫はひやかした。

「きょうは、ばかにめかしているじゃないか、どこへ行くんじゃ！」

「わしかい？ 代議士の山根さんが来てなあ。平泉君やぼくたちをごちそうするっていうから、若松まで、ちょっと出ようと思ってるころなんだ」

代議士の山根とは、かつて福島県青年団有志(東助も含まれていた)が農村窮乏の実情を議会と各大臣に請願する運動で上京した際に、まず訪問した代議士で、農村の実情については何等の知識を持たず、青年団有志を失望させたその人である(令和6年10月配信)。

久世によれば「山根代議士などの肝入りで、この大塩村を流れている溪谷にダムを造って、水力電気を起こそうという計画ができているらしい」ということであった。

これを聞いた東助と島貫は「村長の耳に入れておく必要がある」として村役場へ走ったが、村長も助役とともに、「山根代議士に招待されて、会津若松の料理店に行った」とのことであった。山根の魔手が、村の有力者全部に回ったと思った東助は、多くの人が集まって、地割の砂運びをしていた学校下に走った。昼休みを待って、そこに働いていた人たちを集め、村に新しい問題が起こったことを説明した。

「今度、山根代議士が、この大塩川をせきとめて、水力電気会社をつくるらしいよ。そうすると、村の水力は大きな市の会社に独占せられてしまい、村はその会社から電力の供給を受けるという変なことになるよ。(略)村にある水力は村が利用するようにして、大きな会社に渡さないことにしようよ。この村でできなければ、産業組合耶麻郡連合会の力を借りても、ぼくは電気利用組合の事業は完成したいと思ってるんですがね、みな賛成してくれませんか！」

それから一週間が過ぎたとき、大塩川の溪谷を、赤と白にぬり分けた測量用の棒を持って、印ばんでんを着た男が、うろうろしはじめた。村の小さな温泉宿は、測量隊の一行で満員になった。

この「大塩川をせきとめて、水力電気会社をつくる」という計画は、東助がその実現に向け努力してきた「農村産業組合学校」の開始、運営に大きなダメージを与えることになる。

■ 農村産業組合学校 開校前のいやがらせ

鈴子がもと芸者であることが発覚し、東助は村の青年団長を辞任し、組合の専務理事をも、平泉又吉にゆずらねばならなくなった時、村のために農村協同組合学校を開く計画を立てた(令和7年2月配信)。その実現に向け努力し、その時期が来た。

東助は、八月の盆休みを利用して“夏期農村産業組合学校”を小学校の講堂を借りてやることに決めていた。田村校長もそれに賛成していた。時間割も決まった。講師の交渉もすんでいた。講師には、武蔵野農民福音学校の教授藤島農学士のほかに、東京協同組合学校校長新見栄一氏が決まっていた。八月十三日から三日間、朝七時から、一日八時間ずつ講義を聞くことになっていた。

ところが、突然、そこに問題が起こった。というのは、平泉又吉が、新見栄一を講師として招くことに、正面から反対しだしたからであった。その理由は、新見が無産政党的顧問をしているから困る——というのが、ただ一つの理由であった。

しかし、その裏面には、東助を中心とする小作人階級のものが、新見栄一

を招へいしたついでに、大塩川の水利権問題を種に、会津若松か喜多方町で、大演説会を開きはしないかという恐怖を持っていた。

平泉は警察署に電話するものの警察署はそれを取り上げなかったために、井田村長に「東助に講堂を貸さないようにしてほしい」と依頼する。村長は「平泉が村で多額納税者であること、山根代議士の乾分^{こぶん}であり、山根派の言うことを聞いておかないと都合が悪いと判断」して、東助一派に小学校の講堂を貸さないことにした。「八月十三日に衛生問題の講演会を昼間開き、夜は伝染病予防の活動写真会を開く」ということを口実にしたのであった。仕方なく東助は、産業組合に店舗を無償で提供してくれている斎藤朝吉の母屋を借りて三日間の学校をやることにした。

いよいよ八月十三日午前八時から、村では初めての試みである産業組合学校が始まった。ところが驚くべし……聴講生はたった十六名しか来なかった。

その原因は、山根代議士が社長をしている新聞社が、「無産政党的顧問新見栄一が農民産業組合学校に来るが、このあとかならず、小作争議がひんぱつし、耶麻郡の農民の思想は左傾するであろう」とのデマを書いたことである。そのため村民は震え、産業組合青年連盟のもので、かならず出席すると言っていた人までが、門まで来て帰ってしまったのである。



■ 農村産業組合学校 開校後のいやがらせ

こうして始まった産業組合学校はさらに追い詰められる。開校式が終了し、藤島農学士の「立体農業」の講義のなかばころ、聴衆に混じって聞いていたお竹を、斎藤朝吉が呼び出しにきた。

「お竹さん、まことにすみませんがね、産業組合学校の会場をほかに変更するように、東助さんに言ってくださらないでしょうか——村の青年団が、今夜、宅の庭で盆踊りをやるとかで、これから舞台を作りたいんです」

お竹は、その話を聞いてにが笑いした。

「……また会場を変えるの？ 朝吉さん、青年団って、平泉又吉さんからその話が出たのでしょうか。あの人はむちゃですよ。あなたは、けさの新聞を見て、おじ気づいたのと違うの？」

お竹では話が進まない判断した朝吉は、直接東助に、会場をあけるように話をもちかけた。二人の話の途中から新見栄一の「農民産業組合の根本問題」という講義が始まった。講義が始まると、久世要蔵が、母屋に入ってきて朝吉に「早

く産業組合学校を放りだせ」と督促した。内庭で「特約組合と称するものは、資本主義が、農村を搾取する最後の擬体であります」というのを聞いた平泉は怒り、表に飛びだした。

そして自宅の前に集まっていた測量隊の人夫や村の青年たちを指揮して、舞台を作る柱や材木を三台の荷車に積んで朝吉の庭へ、

「ワッショ ワッショ ワッショ」

と、かけ声よろしく引き込んだ。

このいやがらせはさらに激しくなり、「エンヤ！ ヤイトコ！ マイタ！」など、大声ではやしを入れて杭を打つようになった。

とうとう新見は、第一講の終わるまで、喧噪の中を頑張った。東助も、このうえ、村の青年たちを相手にして戦うことは得策でないと思ったので、会場を田中高子の家に移した。その晩、夜っぴて太鼓が鳴った。産業組合学校に出席しない村の青年男女は、たいてい朝まで踊りぬいた。

■ 組合学校修了後、東助の思いが村民から支持される

開校前・開校後のいろんな妨害に負けず、三日間の農村産業組合学校はなんとか終了した。

しかし、盆が過ぎると、平泉又吉が代表している特約組合が、繭の引き取りを拒むという大事件が起きた。東助は、お竹に頼んで一万円を出資してもらい、養蚕農家の危急を救うため以前から主張していた組合製糸を作った。

平泉又吉は、それに付け込んで、猛烈に肥料代等の催促をした。村民は、特約組合にことしもだまされたと知って、憤慨した。

この混乱のまっ最中に、村会は大塩川水利権譲渡問題を付議することとなった。東助は島貫らと、すべての村会議員を訪問し、その決議を否決させた。「村で平泉の信用が落ちていた時で、村民の多くが、お竹に助けてもらった時だった」ために万事好都合にいったのである。村のためにと行って行動した東助等の思いが村民から支持されたのである。

今回は、農村産業組合学校の藤島講師の「立体農業」が村人に新しい農業に向けてのヒントを与えてくれたこと、東助が山根一派に対抗するため開催した「電灯料値下電力利用組合促進演説会」の内容と結果等をみていくことにする。

<参考文献>

『家の光』(昭和10年8月号)

*文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』(2009年)を参考にした。